令和２年度第２回ピースツーリズム推進懇談会　会議要旨

１　開催日時

令和３年３月２４日（水）　１０時００分から１２時１５分

２　開催場所

広島市役所本庁舎２階　講堂〔広島市中区国泰寺町一丁目６番３４号〕

３　出席者

懇談会構成員

団　体　名　・　役　職	氏　名
被爆体験証言者（平和記念資料館元館長、元国際平和担当理事）	原田　浩【座長】
広島県原爆被害者団体協議会　事務局長	前田　耕一郎
広島大学平和センター　准教授	ファン・デル・ドゥース 瑠璃
特定非営利活動法人 ANT-Hiroshima　理事長	渡部　朋子
特定非営利活動法人ひろしまジン大学　代表理事	平尾　順平
一般社団法人日本旅行業協会中四国事務局　事務局長	髙田　義治
一般社団法人ひろしま通訳・ガイド協会　会長	古谷　章子
広島市市民局国際平和推進部　部長	村上　慎一郎

（計８名、欠席２名）

事務局

広島市経済観光局観光政策部　観光プロモーション担当課長、課長補佐、主事　（計３名）

オブザーバー

広島市経済観光局観光政策部　おもてなし推進担当課長

４　議題

【報告事項】

１　これまでの取組に対する課題の整理

２　令和２年度下半期に実施した取組

（１）情報発信の強化

（２）市民・民間との協働体制の構築

（３）来訪者と市民が平和の思いを共有するための取組

（４）その他平和に関わる市の事業についての情報共有

【意見交換】

３　今後の取組

（１）市民・民間団体等に参画してもらうための提案（案）

（２）令和３年度の取組（予定）

（３）意見交換

５　公開・非公開の別

公開

６　傍聴人の人数

０名

７　会議資料名

資料　　ピースツーリズム推進懇談会（令和２年度第２回）

８　発言の要旨

【１　これまでの取組に対する課題の整理、２．令和２年度下半期に実施した取組（１）、（２）、（３）の説明】

（原田座長）
長年、平和行政に関わってきたが、被爆体験は悲惨であり、それを語り継ぐことはつらいことである。今回、髙田委員の企画によるモニター研修旅行の際に私の被爆体験を話す機会があったが、誰も聞きたくないことであろう。一方、私は旅が好きなので、これまでに、国内外の旅の講座を開いてきたが、旅の話は皆さんにとって楽しいものだ。話をすればするほど引き込まれ、話す方も聞いている方も楽しい。つらい体験の話だけでは難しい。モニター研修のアンケートにも書いてあったが、広島に来て、平和記念公園や平和記念資料館、被爆遺構の見学ツアーだけでは難しいと思う。そこをどうするかが大きな課題だろうと思う。

また、10 年前に東日本大震災が起こったが、遺構保存や伝承のあり方などについて、東北各地の方々と交流を続けている。被災地には震災遺構が残され、それをどのように保存するかが課題になっている。建物の保存と合わせて、先ほど瑠璃委員より説明があったように「来訪者と市民が平和への思いを共有するための取組」として、どのようにつなげていくかが重要である。

事務局から資料の説明があったが、それらに関して、ご意見があれば是非お伺いしたい。

（渡部委員）
下半期に実施した取組の結果を聞かせていただいたが、瑠璃委員から説明があったアンケートについては、集計途中ということか。

（瑠璃委員）
アンケートは 3 月 18 日から開始し、31 日に終わる予定となっており、現在、データを集めている。集計は４月以降を予定している。

（事務局）
アンケートの結果は、来年度の夏に開催を予定している令和３年度第１回の懇談会で共有させていただきたいと考えている。

（渡部委員）
分かりました。もう一つ、髙田委員の方から説明があったモニター研修旅行について、いろいろな展開が見えてきたという話について。なぜこれまでこのような企画が事業者の方から出なかったのかということは、聞いていないか。そこが一番聞きたいところである。例えば、観光バスの話をされたが、観光バスは値段が高い、使えない、というような話は出なかったのか。そのような話ができていないと、ちょっともったいないと思う。もし出来れば、今からでも、参加した方に対して、これまで、何がこのようなものを生み出せなかった原因なのかを聞いてもらいたい。修学旅行は、県外から多くの方が来るが、旅行会社の企画が悪いと感じることが多い。特に、時間の設定が非常にまずく、直接、旅行会社や学校に掛け合って、時間変更や内容の変更を依頼することも多い。つい最近も、福島県から、ふたば未

来学園が来広した時に、旅行会社が学校に十分な情報を伝えていなかったということがあった。モニター研修旅行をされるならば、今後、その点についても切り込んでいってほしい。

それと平尾委員と一緒に実施された取組に関しては、後で発表があるのか。

（平尾委員）
後程発表させていただく。

（平尾委員）
髙田委員より報告いただいた取組について、渡部委員がおっしゃったとおり、このような企画がもっともっとあったらいいと思う。私たちも広島駅で、海外から来広した方を案内するという活動を行っており、メンバーには、観光に関わる方として旅行代理店の方々もいるが、もっと現場というか、例えばホテルのフロント、タクシーの運転手、広電の電車・バスの運転手などといった方々が、このような内容（本川小学校や袋町小学校の平和資料館など、市内の様々な平和関連施設）を知っているかというと、そうでもない。私達からすると身近な人々ではあるが、まだまだ情報が届いていないように思う。一番近いところから徐々に情報を広げていくという方法を同時に取ることによって、その方々が資料館だけでなく、他の施設等も案内できるようになるということも大事だと思ったので、コメントさせていただいた。

（村上委員）
平和推進課も今年度は、コロナの影響で予定されていた事業が実施できず、規模縮小になったが、観光政策部もそうだったのではないかと思う。その中で、コロナが収束して人の往来が活発になるまでの準備期間として、様々な取組を実施された。報告の中で印象深かったのは、「思い出の中の『ピース』フォトコンテスト」という取組だった。このような切り口で平和に興味を持ってもらうというのは非常に面白いと思った。広島市では、平和文化の推進に取り組もうとしているが、これは日常生活の中で平和や豊かさを感じること。例えば、文化、芸術などの活動を通して平和を感じるといったことが大事ではないかと思っており、このような取組も平和文化につながるものだと思った。

（原田座長）
次の議題に移る。

【２　令和２年度下半期に実施した取組（４）その他平和に関わる市の事業についての情報共有についての説明：
①平和記念公園における旧中島地区被爆遺構の展示整備について、村上部長が説明
②レストハウスの利用について、広島市経済観光局観光政策部おもてなし推進担当課長が説明】

（原田座長）
現在の説明に関して、何か質問などがあれば、お願いしたい。

（前田委員）
レストハウスのチラシの１階部分の説明の中に、「観光案内所では、ピースツアーをはじめとする体

験プログラムなどをご用意。」とあるが、具体的にはどのようなものか。

（観光政策部おもてなし推進担当課長）
体験プログラムは、指定管理者の自主事業として実施している。コロナの感染拡大の影響で予定していたもののほとんどが実施できておらず、具体的に申し上げられるものはないが、コロナが落ち着き、誘客できるようになり、インバウンドが来広するようになったら、指定管理者の提案に基づいて、広島市、そして関係機関の方々で調整しながら、体験プログラムを含めた平和記念公園内のツアーというものをやっていきたいと考えている。

（前田委員）
今の段階では実施していないが、そこへ行ったら具体的なプログラムをやっている仕掛けがあるという、理解でよいか。

（観光政策部おもてなし推進担当課長）
はい。

（渡部委員）
観光案内所では、平和記念資料館啓発課が実施しているピースボランティアや、レストハウスの指定管理者が実施しているツアーなどについて、ワンストップで紹介できる体制がとれているのか。

また、ロゴについてであるが、被爆建造物や被爆樹木は、広島市で統一したロゴを使ってほしい。来訪者に、大正屋呉服店が被爆建造物であるということが一目見て分かるということが必要だと、以前から考えている。マップの中のロゴも含めて、被爆建造物や被爆樹木について、統一感をもって、案内することが必要ではないか。また、ロゴを作成する場合には、そのデザインがそれでよいかということも議論が必要なのではないか。

レストハウスの開館時間は、以前より長くしてあり、その方が良いと思う。以前は閉館時間が 17 時であり、その理由を聞いたところ、「平和記念資料館と合わせている。」という回答であったが、そうではないと思う。平和記念資料館を見た後に、レストハウスを利用する方も多いのではないかと思うので、開館時間は長くないといけない。

（観光政策部おもてなし推進担当課長）
観光案内所なので、様々な問合せがあることを想定しており、その内容をきちんと吸い上げて回答するよう指定管理者へはお願いしている。しかし、具体的にどう展開されているかは、把握していないので、確認したいと思う。
（※事務局補足：レストハウス観光案内所に確認し、有料・無料のツアー含めて案内しているとのこと。）

また、ロゴについては、リニューアルする段階では、レストハウスの建物としてのロゴを作ることも検討していたが、現時点では、広島市が作っているロゴはない。チラシにある黄色のロゴは、指定管理者が作ったものである。指定管理者より要望があり、レストハウス全体のロゴとしてではなく、１階の

売店と２階のピアノカフェの部分についてのロゴという整理で使ってもらっている。しかし、ご指摘のとおり、少し分かりにくいため、今後検討していきたい。

開館時間について、本市としても、できる限りレストハウスの開館時間は長い方がよいと考えている。制度上のことを申し上げると、広島市からの要望は指定管理者に伝えているが、営業時間が長くなるということは、指定管理者の人件費など、経費部分に関わってくるので、最終的には、指定管理者と協議をしながら進めている。今後、開館時間を伸ばした方が良いなどのご意見やご要望があれば、協議しながら進めていきたいと思う。

（渡部委員）
部屋貸しについては、どうなっているのか。

（観光政策部おもてなし推進担当課長）
部屋貸しについては、チラシにある３階の多目的室と２階の休憩室の２部屋が利用可能である。事前に申し込みをしていただく必要があり、料金設定は１時間当たり 3,000 円である。この金額は、近隣の部屋貸しの金額を参考に設定している。平和記念公園内にある施設であるため、特に平和学習として修学旅行生などが使用される場合は、減免により無料としている。

（原田座長）
この会議の中でもいろいろ議論してきたが、当初から、市民と来訪者の拠点施設が必要だという意見があった。そのような意味から考えると、レストハウスがその役割を果たしてくれるのが一番良いと思うが、スペースの問題などにより、どこまでできるかというのはある。ただ、市民と来訪者の接点がないということは課題であるので、これからも議論していく必要がある。

また、被爆ピアノをもう少し一般の市民に公開できればいいと思う。例えば、定期的に公開できないか。シャレオで、（ストリート）ピアノを弾いている人を見ると、とても楽しそうに演奏している。上手な人もいれば、そうでない人もいるわけだが、本人が気持ちを込めて演奏している。被爆ピアノというのは、確かに被爆資料という立場から言えば貴重なものであるが、市民の身近なところで活用することができれば良いのではないかと思う。被爆者の立場から言えば、爆心地から３キロの距離で、しかも屋内で被爆しているので、被爆したピアノでガラスが刺さっているかもしれないが、人間が被害を被ったわけでもないので、もう少し来訪者や市民の身近なところで活用してもらいたい。

指定管理の中で、公園巡りのツアーも計画しているし、先ほどの話でもあったピースボランティア、そして、それ以外の様々な団体が平和記念公園を中心にした史跡めぐりというツアーを実施しているが、窓口が一つになっていないので、ガイドを希望する個人や団体が、それぞれの団体に声をかけてガイドなどを手配する状態になっている。結果的には料金もばらばらである上、お互いに人数を確保するのが非常に難しくなっており、申し込みをする側もそれぞれの団体に申し込みをしなくてはならないという状態である。一つの団体がまとめて受付をして、それぞれの団体に配分するということができればよいが、謝礼金額やレベルの問題もあるので、この件については、これからも課題として議論をしていく必要があるのではないかと思う。

【３　今後の取組（１）市民・民間団体等に参加してもらうための提案（案）」】

（平尾委員）

これからＰ１７の「市民・民間団体等に参加してもらうための提案（案）」について説明するが、その前に、Ｐ４、前回、第１回懇談会で挙げられた課題について触れたい。今後の課題の中の「市民や民間団体が行う平和に関する活動との連携も必要」という部分である。ピースツーリズムでは、これまでルート設置や情報発信など、行政を中心とした活動は進んでいった。その中で、市民が参画できていたかという議論において、市民参画はもちろん大事であるけれども、前回（令和２年９月）の懇談会で、民間がやっている活動に、行政が参加するという姿勢も大事ではないか、という話をさせていただいた。そこを踏まえ、今回、市民や民間団体がどのような活動をやっており、ピースツーリズムという文脈においてどう連携することができるかなどを検討するための調査を、事務局と一緒に企画した。

Ｐ１７に座談会参加者、ヒアリング先の団体の一覧を掲載している。委員の皆さんにもヒアリングを行いたいと考えたが、その機会は次年度以降に譲り、今回は、敢えて、懇談会の委員のメンバーでない方々に話を聞くことにした。参加者として、平和に関する場を提供するカフェの店主、有料・無料問わず平和に関わるツアーを実施している事業者の方々、また、街歩きをされている団体など、比較的若い世代、20 代から 40 代くらいの方々に話を聞いた。その様子はＰ１２に写真があるが、オンラインで実施し、第１回目は「ピースツーリズムとは」、2 回目は「国際平和文化都市における観光とは」、3 回目は「今後具体的にどのような取組が可能か」というテーマで話し合った。

参考資料８というのが、そのまとめであり、それをご紹介させていただきたい。

こんなことができるのではないかというのと同時に、今行われていることや今後取り組んでいきたいことのアイディアは、このような方向性に位置づけられるのではないかということをまとめた資料である。ここでは、一つ一つのアイディアについて議論をするというのではなく、大きな方向性について、確認したい。

今後の方向性について、（１）被爆の実相を伝える取組の継続、（２）関連資料、情報の収集・集約、（３）ルートマップの活用増、（４）ホームページの活用・閲覧増、（５）ピースツーリズム推進の体制づくり、（６）平和構築を学ぶ場づくり、（７）平和を感じるまちとなるための取組推進、などが考えられる。

このような議論を通して、何が分かったかということだが、大きく３つあると思う。一つ目に、市民が参画していくにあたっては、協働できる場を作り、初期の段階から市民を巻き込み、一緒に作っていくことが必要であるという点。ピースツーリズムのルートの設定、情報発信は行政主導で行ってきたが、完成したものに、関わってもらうというのはなかなか難しい部分もあるので、市民に、開発の段階から関ってもらうことで、市民の当事者意識の醸成にもつながり、また、ユーザー目線のコンテンツを作ることができるのではないかと思う。

二つ目に、既に平和に関わる活動をしている方々がいる中、その活動を支援していくというスタンスも必要であるという点。今回の調査に参加していただいた方々でも、広島市が主導するピースツーリズムに対する認識はあまり深くないという気がした。私たちも日常的に情報を届けていかなければならな

いだけでなく、やはり、既に自転車でのツアーや体験型の街歩きをしている方々がいるので、彼らの情報を紹介するなど、彼らの支援も必要になってくるのではないかと思う。

三つ目は、活動の進め方に関して。活動を進める際に、パイロットを幾つも実施するような、ＰＤＣＡを何度も回せるような環境づくりが大事になってくる。大きなプロジェクトを企画するというよりは、是非パイロット・プロジェクトで効果を検証しながら、よりたくさんの方々にピースツーリズムに取り組んでいただく、一緒になって企画してもらうことを通して、一緒に「イズム」を作っていくことができるのではないかと思う。

かなり大きな話の内容のところを掻い摘んで話をしているので、ご不明な点などがあると思うので、それは是非、質問の中で回答させていただきたい。

（原田座長）
特に質問が無いようなので、次に、新年度の取組の予定を事務局より説明をお願いする。

【（２）令和３年度の取組（予定）の説明】

（原田座長）
Ｐ１８の「①情報発信の強化」の「平和文化月間におけるプロモーション」とあるが、平和文化月間について、村上委員より少し補足していただければと思う。

（村上委員）
先ほど、平和文化について少し触れたが、音楽・芸術活動・スポーツなど日常の中で平和を考えるという取組である。これは、平和首長会議の取組で、大きな３つの柱の一つである。今年の８月の総会に合わせて企画される予定で、今年１１月に平和文化センターが中心になって、音楽などのイベントを広島市だけでなく、平和首長会議に加盟している 8,000 以上の都市と協力しながら、多くの都市で実施する予定としている。

平和文化の取組の一つを紹介すると、各関連都市の子ども達に「平和なまち」を描いてもらう絵画コンテストを実施している。世界各国から絵画を募集しており、審査をして、優秀賞など受賞作品を選び、そのデザインのクリアファイルを作成して、様々な場面で活用している。このような取組を世界各地で展開していこうということで進めている。

（原田座長）
広島国際アニメーションフェスティバルもこの取組の中に入っているのか。

（村上委員）
今の枠組みには入っていないが、趣旨としては同じである。

（瑠璃委員）
各国から絵画を募集して、優秀な作品を使ってクリアファイルを作るという取組について、例えば、それを販売するということはあるのか。せっかく良いものがあるので、それを市民も手にしたいのではないかと思う。また、身近なレストハウスなどで手にすることができたらよいと思う。

もう一点、被爆遺構の保護についても非常に大事な取組だと思う。海外にも石の遺跡は残っているが、被爆遺構に残っている、畳や焦げた土など、世界でも類をみないのであり、今後、被爆の実相等を伝えるという中で、非常に大事である。広島大学平和センターと読売新聞が共同で行なった「被爆 75 年学生平和意識調査」によると、多くの学生が、長崎・広島の被爆者の亡き後は、それぞれの都市のメッセージ力が激減するだろうと考えているという実態がある。そうなってはいけない。犠牲になった方が生きた証、それを伝える遺構を守っていくというのは、素晴らしいことだと思う。さらに付け加えれば、そういった取組があることと、平和をテーマとした会議や各種イベント、ピースツーリズムが互いにつながる、一貫したテーマで連動するように実施することが、今後の活動の成功を導くと考える。また市民が率先して参加できるような企画、例えば市民が歌を作ることなどを一つの流れにする企画があればいいと思う。人が共に歌う時、こころを一つにする作用がある。一緒に歌うことで、一種の「仮想コミュニティ」が形成される、と言われている。一緒に平和を考えながら歌えるようなものがあったらよいと思う。クリアファイルなど物づくりとあわせて、それぞれの取組を一つにつなげるような形にしていただけたらと思う。

（渡部委員）
平和文化月間は、平和首長会議がリードしてやるのか。平和首長会議が何をやっていて、何を目指しているのか市民は知らない、あるいは知らされていないという現状がある。今の状況で、平和文化月間を企画しても、限定的なものになる可能性があるのではないかと心配している。2020 ビジョンについても成果が発表されたが、記者会見は一度も開かれておらず、ニュースレターしか出していない。もしかしたら記者会見を開いたかもしれないが、市民に分かる形で、平和首長会議が何をやってきて、どのような成果があって、これからどうしていきたいのか、といったことが伝えられていない。

例えば、平和首長会議の３つの柱について、三番目が「平和文化」であると総会で決まったが、一番目の柱は、「核兵器のない世界の実現」、二番目は、「安全で活力のある都市の実現」を目指しているということを、どれくらいの市民が知っているだろうか。具体的に言えば、イギリスの核兵器保有の増強方針について、市長は、平和首長会議の会長としては意見表明しているが、広島市長としてはコメントしていないなど、二つの立場を使い分けておられるため、市民にとっては非常にわかりにくい。

ピースツーリズムについても同じだが、オールひろしまのものにしていく、オールひろしまを対象とした情報発信をしていく必要があるのではないか。一部の限定的な取組にならないようにしてほしい。ここで議論するかは分らないが、平和文化月間の時期について誰も知らないという状況を明らかにした上で、取り組む必要がある。

被爆遺構の保存については、非常によい取組だと考えている。前から、黒い土が平和記念資料館の出口付近に、単にケースに入れられているのを見て、居ても立っても居られなかった。焼けた土というの

は、それだけで強い発信力を持っており、多くの人々に見てもらえるというのは、素晴らしいと思う。それと同時に、そこに人々の生活があったということ、人々の生活の視点で展示があると、なおよいと思う。先ほどの修学旅行の話に戻るが、ゆっくり回ったら、どれくらい時間がかかるのか、といったことを先取りして発信していってほしい。今のコロナの時期が、チャンスだと思う。今の間にできるだけ発信をして、来ていただいた時には、迎える体制ができている状態にしてほしい。

インターネット調査に関してももっと早く実施していれば、３月末に結果を出すということもできたのではないかと思う。いろいろなことがあっただろうし、事情もあったとは思うが、機を逸してはいけないと思う。ピンチだけどチャンスだということを伝えたい。広島にはあまり時間はないという気持ちがある。

民間事業者との座談会・ヒアリング調査に関して、海外から学ぶという視点が抜けている。海外の人びとが、どのような思いで、どのような平和に対する取組をしているのか。もう広島が中心ではない、中心になれないということを危惧している。そのような中でも、一画を担いたいと考えている。世界の人々が、平和のためにどのような取組をしているか知り、お互いに学び合えるようになってほしい。それが、ピースツーリズムとして多くの人の関心を呼び、広島に来ていただけるようになるとよいと思う。そして、調査が終わったので、これでおしまいではなく、引き続き、議論する機会を持ち続けてほしい。その支援をピースツーリズムの中から行っていただければと思う。私の願いは、広島に来た人が、「広島の人は優しいね。」「また来よう。」「また一緒に勉強したいね。」というようになることである。

（古谷委員）

今年度は、通訳ガイド協会のガイドの仕事はゼロだった。しかし、１２月には中国・台湾の方々と、今年３月にはヨーロッパ、アメリカのエージェントとのインバウンド商談会が Zoom であったり、被爆者や被爆伝承者の話を英語、スペイン語、フランス語などに通訳をする仕事や、観光庁の英語研修などの仕事があった。年４回刊行されている「グランデひろしま」という雑誌があり、３／1 号に「移民物語」という題で、昨年８月から１０月まで、CLiP HIROSHIMA で開催した「日米友好の懸け橋」というイベントについて記事を書いた。イベントは、米国ハワイ生まれの被爆者で医師の嘉屋文子さんが、日米の若者をつなごうと、１９９３年から１４年間、平和記念式典を含む約２週間、奨学金を出し、米国の若者を広島に招聘する活動を紹介したものである。昨年、その奨学生の何人かを広島に招聘しようと企画したが、コロナで叶わなかった。しかし、奨学生たちには、広島の滞在の記憶が強烈に残っていて、今でも教育に携わっている方が多くおり、核廃絶や平和への思いの共有などを次世代に伝える取組をされていることも分かった。

嘉屋文子さんの遺品（ハワイから日本に持って帰られたもの）を預かっているので、その遺品をどうしたらよいかと悩んでいる。是非、広島移民資料館を作ってもらいたい。被服支廠を残すという議論もあるし、例えば被服支廠を活用して、そのような資料館を作ってもらいたい。そのようなものができれば、日系の人たちが自分のルーツを探りたいと来られた時には、案内できると思う。

その他、ピーターソンひろみさんというホノルルの日本語教師の方との交流についても紹介したい。オバマ米元大統領の出身校として知られる米国ハワイのプナホウ学園で、日本語教師をしていた先生だ

が、原爆被害を扱った中高生用の日本語教科書を出版し、その印税を利用して、２００９年からプナホウの学生と広島女学院の学生が交流するプログラムを１２年間実施してきた。退職されたので、学校の枠を超えて、ヒロシマ・ピース・スカラシップを立ち上げたいと相談され、Zoom で交流している。資料館や紙媒体での発信は有効であると考えるが、生身の人間の交流、若者たちの交流を始めるということも大事ではないかなと思う。

また、Zoom やウェビナーを利用した情報発信も有効であると思う。カルチャーニューズというロサンゼルス在住の方が「きてみんさい広島へ」というウェビナーを定期的に実施している。具体的には、３月２６日(金)、広島城の紹介を広島市役所で都市計画に携わってきた山崎学さんが解説し、私もパネリストで参加させていただく。このように広島にまつわることを、日本国内だけじゃなく、世界中から関心を持っている人が集まって、意見を交換する場があるということを、広島市は知っておくべきだと思う。

ハワイ大学にある、スパーク・マツナガ平和研究所が月に２回ぐらい、平和にまつわるウェビナーを実施している。丁度、昨日、「放射線教育　過去と未来」という題で開催された。このように、実際にオンラインで話し合うということもできるのではないかと思う。

【事務局の説明：意見交換のテーマについて】

（瑠璃委員）

広島大学平和センターでも、オンライン講座など続けてきたが、より広く市民参画いただける形での開催を考えている。古谷委員がおっしゃっていたように、オンライン・コミュニティというか、コロナ禍でもウェビナーで会えば、居場所があり、交流を深め、活動継続できる機会を作るのは大切だと思う。お聞きしていて素晴らしいと思ったのは、例えガイドの仕事がなくても、じゃあ、何ができるかを考えられ、しっかりとしたネットワークを構築されているということ。そのようなネットワークは是非とも、援用させていただきたいと思う。以前、海外からのゲストが来た時に、古谷委員に通訳をお願いしたが、その人は「やはり現地で誰かと会って、その人の知識を頼りに、自分も広島について学びながら楽しむ機会を得られる。これが本当のピースだ」と言われた。その時、平和記念公園だけではなく、宮島なども案内して頂いたが、案内する方、現場の人から得られる知識の深さと重要性を感じた。だからこそ観光者も現地を楽しめる。やはりこれがピースツーリズムを支える力であり、ピースツーリズムの魅力ではないかと思う。そして、ウェビナーの話に戻るが、大学などでも、観光について研究発表しているが、それが学際の中で完結してしまっているのが残念だ。古谷委員、渡部委員のご活動報告にあったような会議や交流の情報、大学の公開講座の情報など、何かメンバーの中でも情報共有ができるプラットフォームがあれば、個々の活動を効果的につないでいけるのではないか。

（村上委員）

先ほど出たご意見について、回答させていただければと思う。

まず、世界の子どもたちが書いた絵のクリアファイルについて、現在販売しているのかという質問については、これは平和文化センターの事業として実施しており、販売しているかどうかについて確認してみたい。もし販売していないならば、非常によい提案だと思うので検討したい。歌に関して、広島市

には「ひろしま平和の歌」がある。戦後に広島市を世界平和の原点にしようという願いを込めて作られたもので、平和記念式典などでも流しており、広島市としてはそれを広めたいと考えている。

平和文化月間については、平和文化センターが担当しているが、広島市からの委託事業として、平和推進課が中心となって実施している。平和文化センターだけの事業ではなく、観光セクションとも協力して進めていきたい。残念ながら、平和文化月間については、場当たり的になっているところもあり、事業先行型になっている部分もあると考えている。個人の思いとしては、施策としての体系的な整理が必要であると思っている。イギリスの核兵器保有の増強方針に対する市長コメントについては、市長は、平和首長会議の会長としてもコメントを出したのだが、残念ながら記事にならなかった。タイミングの問題や、ＰＲの仕方が不十分だったというのもあるかもしれない。

（原田座長）
旧被服支廠の話も出たが、県の１棟外観保存、２棟の撤去という案については、もうないだろうと思う。結論はまだ公表されていないが、残すということを前提にした議論がスタートしている。幸いながら、市長からも全棟を残すという話を頂いたので、村上委員は大変だと思うが、国、県と市が一体となって、まさに加害の歴史と被害の歴史をどう伝えていくことができるかだと思う。建物の文化財的な価値をどのように位置づけるのか議論する必要がある。保存する被爆建造物として考えれば、広島大学旧理学部一号館の方も前に進んでいないようだ。平和文化の事業についても一体となって発信していってほしい。

（渡部委員）
研修旅行の件で、私は、本日、髙田委員より、大久野島、呉、広島と結んで、加害と被害の歴史をきちんと伝えることの大切さを学んだ。それと同じことを広島の街でもできると思う。軍都であった広島ということも分かっていただき、広島の中を周遊して、加害も被害も、あるいは、加害と被害を超えて何をしたらよいかということも感じ取れるようなものを、ピースツーリズムとしてやってほしい。国内外の方を呼び込む、日本の子ども達、海外の子ども達を一緒に学んでもらうことを目指して取り組んでいければ、素晴らしいなと思う。小さな民間団体の活動もあるので、多少の金銭的な支援などもしていただくことも合わせて検討していただきたい。

（原田座長）
本川小学校平和資料館の展示のあり方について、教育委員会や平和記念資料館と一緒に検討を進めている。本川小学校の校長先生も前向きに取り組んでおり、成果が出てきている。今後は地域に出かけて、それぞれの小学校の平和資料館の在り方について考えることが必要である。また、袋町小学校、幟町小学校などへの支援も必要である。平和記念資料館は指定管理であり、本川小学校平和資料館は学校施設なので教育委員会の予算で組まれている。しかし、教育委員会だけで進めていくのは難しいので、中身は平和推進課が関わっている旧市内の小学校については、地域住民と協調して、それぞれ特色のある平和学習のあり方について考えてほしい。

十分な議論の時間が取れなかったので、協議が出来なかった事項については、後日、メールで事務局へ届けてほしい。

【懇談会実施後に、委員２名よりメールで頂いた追加議論】

（前田委員）

市が関わっている以外のガイドとの連携を図ってはどうか。

現在、実際に広島を訪れるということができにくい状況となっており、web など様々な媒体を通じて広島を知ってもらう取り組みが行われている。現在はいずれ再開される現実の広島訪問に向けて、可能となったらぜひ行ってみようと人々の広島への関心をかき立て、訪問欲求を高めている時期と言える。

広島をしっかりと知ってもらうためには、広島を実際に訪れて広島のリアルな空間に身を置いて様々なことを感じ取ってもらうことが望ましいことであるのはもちろんである。広島を認知し訪問を促す取り組みを続けることも必要だが、経済波及のためにも出来れば人々に現実の広島を訪ねて欲しいところである。

広島に実際に来てもらったときのことを考えてみると、訪問者は路面電車に乗ったり、平和記念公園、平和記念資料館などを訪ねたり、お好み焼きや瀬戸内の食べ物を摂ったりと、それぞれの興味に応じた様々な動きをする。その動きの中で広島を肌身感覚で認識するはずであり、それが現実の旅、訪問の醍醐味となる。こうした訪問者の行動に関して、私がもう一つ大事だと考えているのはその地に暮らす人々との接触である。通りすがりの人に優しく道案内をしてもらったり、好みの食事の店、ここは見ておいた方が良いというお薦めの場所・穴場を教えてもらったりなど、土地の人から親切にしてもらい土地の人ならでの情報を得ることが出来ればその土地の印象はぐ～んと上昇する。入った飲食店でのやりとりや人とのふれあいが旅、実際の訪問における大事な要素だと思う。

このようなリアルな広島訪問において人との触れ合いが大事であるとすると、市全体での「ふれあい」とか「おもてなし」とかを考える必要があることは当然であるが、当懇談会の範疇ですぐに思い浮かぶのが、平和記念資料館のピースボランティアや観光ボランティアガイド協会のガイドの方々のことである。例えば、これらのガイドの方々が、ピースボランティアであればより幅広い観光情報を、観光ボランティアであればより深い平和・被爆関連情報を蓄積していければ、よりよいと思う。例えば、市から情報提供を行い、可能ならば研修の機会を設けてはどうだろうか。

ピースボランティア、観光ボランティアともに、知識欲旺盛で深く広い知識をお持ちかもしれないし、すでにこうした取り組みがあるのかもしれないが、お互いに学び合う場があればよいと思う。

私の属する被爆者団体でも平和記念公園内を案内する「碑めぐりガイド」活動を行っており、私ども以外においても同様の活動を行っている団体は多い。これらの活動者は、公園内のことや平和・被爆のことに関しては知識を蓄積し、訪問者に説明ができるが、一般的な観光面に関してはあくまで個々人の知るところに拠った説明を行っているのが実情である。そこで、広島市がピースボランティアなどに実施している研修と同様、あるいはそのエッセンスを集めた研修や情報提供を実施してはどうか。

現在の取組は、コロナ禍で広島をリアルに訪問できない状況の中で行う努力だと思う。コロナ禍が明ければ現実の広島訪問が可能になり、そのときには広島という現実空間に身を置き様々なことを感じてもらえる。その際には広島の人との実際の接触も大事になる。そのために、ガイドを担っている人々の役割は大きいと考えている。

（渡部委員）

これまでの大きな成果として、ピースツーリズムの公式ＨＰもでき、ルートマップもできた。これからは、いかにこの取組を、多様な国内外の方に知っていただき、活用してもらうか。実際にどうやって多くの方に巡っていただくか、その仕掛けの開発、あるいは戦略が必要になる。

これはもう市役所の担当部署だけではできないと思うし、市民や民間事業者との連携は必ず必要である。この前提に立って次の点を提案する。

①市民対象に多くの方にルートを巡っていただくためのアイディアや提案を公募する。
②民間事業者からピースツーリズムとの連携の具体的な案を募り、試験的に行う。
③ホテルやホステルなどのフロントの方などに、実際にルートを巡ってもらい、どう宿泊客に紹介すればよいか具体的に提案してもらい、その提案のあったホテルに、ピースツーリズム参加ホテルとして、ＨＰなどで広報する。
④民間事業者のツアーなど、実際の現場を互いに知っていただき、互いにつながって事業拡大が出来るような、マッチングの場をつくる。
⑤平尾委員が作ったZoomでの座談会に、懇談会の委員なども参加し、当事者の生の声を聴く。
⑥教育委員会に、自分の産まれた地域を知る授業で、ルートを巡る提案をしてもらい、地元の子ども達がその授業の後、自分の学区内のルートのガイドとなれるように、公民館などで講座を開設する。
⑦ピースボランティアや広島市の観光ガイドの方にルートを巡ってもらい、ルートのガイドが出来るように講座を開設して学んでいただく。ピースツーリズムガイドとして認定も行う。
⑧ルートマップを使った、修学旅行の具体的なコースを民間事業者に提案してもらい、ＨＰなどで民間事業者の名前込みで広報する。